

第9章 ヒトの^{人間的}特殊性

上位社会からの規制——再検討

つながりと規制の実在を探るためのもうひとつの手がかり

最終章となる本章では、第7章で解説した抵抗という概念を有力な武器として、ヒトという種が他の動物といかに違う存在であるかを、従来とは異なる視座から概観し、人間の特殊性を可能な限り浮き彫りにすることにしたい。最初に、第6章でとりあげた、生物社会の見えないつながりと上位社会による規制という大問題を、別の角度から検討することから始めよう。生物社会の要に当たるこれらの問題を探るに当たって、重要な手がかりになりそうなのは、やはり生物社会学の根本原則の改変を迫りかねない、小笠原群島その他で観察されている先述の現象群であろう。

島嶼や湖沼では、それぞれの面積が小さいために、当該の生物社会の規制が十全なものにならず、外来種の侵入も容易になる反面、その分だけ種も絶滅しやすいのであろうが、おそらくはそればかりではない。上位社会からの規制が弱い分だけ、種の生成も起こりやすいのかもしれない。ただし、このようにして起こるのは、もちろん大進化ではなく小進化にすぎない。こうした角度から見ても、大進化は小進化とは異質な原因によるものであることが推定される。仮に大進化という言葉が、目ではなく綱以上^{もくこう}の分岐生成を意味するすれば、小進化とは質的にも量的にも相互に大きな隔たりがあることから、小進化の連續が大進化になるわけではないことが、より明確になるであろう。

言うまでもないが、一般の生態学では、生物社会学的な立場によるものとは全く違ったとらえかたをする。陸から分離した大陸島ではなく、海底火山の噴火によって生まれた海洋島である小笠原群島では、そこに棲息する生物は、すべてが、何らかの方法で他の陸地から辿り着いた外来種である。その結果、わずかな数の種およびその個体で繁殖を始めることになるため、そもそも遺伝子が偏っている可能性が高い（創始者効果）。また、個体数が少ないと、その中

で生じた突然変異が、生存に有利か不利かとは無関係に蓄積ないし排除されやすいという側面（遺伝子浮動）もある。さらには、いったん増加した個体数が何らかの理由で激減した場合には、創始者効果と同じく、遺伝子プールに偏りが生ずることになる（ビン首効果）。大陸との、また島同士の物理的隔絶の結果として、異所的種分化も起こりやすい（清水、2010年、35-39ページ）。かくして、小笠原群島のような海洋島では、アフリカの湖沼群と同じく、「生物進化の実験場」と呼ばれるほど、新種が生まれやすくなるのであろう。

ちなみに、第6章の註5でふれておいたように、ロバート・マッカーサーが、共同研究者でもあったエドワード・ウィルソンとともに提唱した、島嶼の種数平衡理論（MacArthur & Wilson, 1963）という数学的理論がある。これは、島嶼では絶滅する種と外部から到来する種の数が平衡するという仮説であるが、しばらく前から、あまりに単純すぎて実情に合わないことが明らかになっている（たとえば、Brown, 1986; Lomolino, 2000）。経験科学の理論は、このような単なる近似では意味がなく、ベルクソンの言うように、精密な観察に基づいて、「実在のまがりくねった動的な輪郭」（ベルクソン、1965年a、14ページ）を可能な限り忠実に辿るものでなければならない。

これらの理論は、海洋島で起こっている現象を、従来の生態学的な学説を拡張することで説明しようとしたものであり、それ以上のものではない。重要な対抗仮説が存在しなかつたために、そのまま受け入れられていたにすぎないのである。その対抗仮説となるのが、生物社会学的な概念に基づく仮説ということになる。とはいって、この対抗仮説は、抵抗の強さという点で、これまでのものとは根本から異なっている。

この場合の焦点が、狭い地域の中で起こる現象を観察することにあるのは言うまでもないが、小笠原群島であれば、具体的には、父島と母島での土着種と外来種の棲息状況の推移を、自然植生がまだかなり残されているとされる兄島でのそれと比較することであろう。種子が土中に保存され、発芽すべき時をひたすら待つ植物と違って、動物の場合は、再生の様相も多かれ少なかれ異なるであろうから、これまでとりあげてきたような側面を、植物複合社会の成熟度との関係を軸にして観察しなければならない。現段階では明確な結論など出せるはずもないが、これらが何らかの形で突き止められれば、種個体間のつながりや上位社会による規制の実在が、よりはつきりすることであろう。

ちなみに、ダーウィンは、「明瞭な変種、すなわち私の言う発端種をいちば

んよく生み出すのは、いちばん繁茂している種、いわば「優占種」であると主張した。優占種とは、世界中に広く分布しているとともに、それぞれの土地で最も広い分布をもつ、個体数が最も多い種のことである（ダーウィン、2009年、上巻、105ページ）。ダーウィンのこの主張に対しては、先にふれておいた通り今西が鋭く反論している。わが国では、分布が広く個体数も多い普通種には亜種の存在が認められないのに対して、南西諸島のチョウには例外的に亜種が多いという事実を指摘していたのであった（今西、1977年a、78-79ページ）。したがって、生物社会学的な立場から、少なくとも小進化についてここで導き出されるべき結論は、ダーウィンのものとは正反対になる。このことは、島嶼や湖沼で同所的種分化が高い頻度で起こっているらしいことを示す最近の調査研究（第6章註10参照）によっても裏づけられるであろう。

上位の実在への従属と自肅

ところで、ニワトリに見られる“つつきの順位”などの事例をもち出すまでもなく、同種の優位な個体への従属という現象があることは、昔からよく知られている。言うまでもないが、これは、物理的に実在する上位個体との関係にまつわる現象なので、非物理的な上位社会からの規制とは全く異なる概念である。とはいっても、仕組みはほぼ相同なので、上位社会からの規制および上位社会への従属という現象のアナロジーとして、この現象を少々眺め、この問題を検討するための手がかりを探すことにしておこう。

コンラート・ローレンツ比較動物行動学研究所に所属する鳥類行動学者、レナーテ・コトバウアー＝ヘルマン（現、ウィーン自然史博物館）は、カラ類を対象にした観察学習実験で、実際に口の開いた瓶からバターを食べた個体であっても、他の個体の蓋開け行動を見ただけの個体であっても、同じように蓋開け行動をしたという事実を報告し、この現象について次のように述べている。

カラ類の鳥は、観察学習によって蓋開け行動を身に着けるが、優位の個体に妨害されて学習の対象にじかに接することができなかつた場合でも、他者の行動を目視することを通じて同じ行動ができるようになった。その事実が明らかになったのは、優位の個体をその場から排除したところ、全個体が蓋開け行動を見せたからである。それまで蓋開け行動をしていたのは群内の少数の個体にすぎなかつたにもかかわらず、全個体が蓋開けの“知識”を得ていたことが、この事実から明らかになる。そのため、それまで蓋開け行動をしなかつたとし

ても、社会的状況が変わった時には、この“伝統”を広めることができるようになる (Kothbauer-Hellmann, 1990, p. 359)。

一般の生物学者は、当該の行動をしないと、その行動ができないものと即断しがちであるが、それだけで決めつけてはならないということである。知識や技術をもっていても、優位の個体の前では、あるいは群れの中にいる時にはその発揮を避けるという現象は、今西が、擬人主義的な言葉で“遠慮”と呼んだ行動と同質のものなのであろう。ヤーキース地域靈長類研究センターのクリスティン・ドゥリーらは、西洋の研究者には珍しく、こうした行動を、自粛 voluntary inhibition という言葉で表現している (Drea & Wallen, 1999, p. 12969)。

人間の場合もそうであるが、上位個体からの圧力や権威に従属するだけであれば、特に相手が見えるところにいる場合には、優劣や競争というパラダイムで解釈される可能性が高い。それに対して、動物が遠慮や自粛をしているとすると、彼我の立場の違いを勘案したうえで、主体的な判断のもとに行行動を自制していることになる。人間の場合でも、外部から観察しただけでこの区別をするのは難しいことが多いが、動物の場合には、それよりもはるかに難しい。とはいえ、コトバウアー=ヘルマンの実験では、カラ類の鳥が、実地訓練なくして観察のみを通じて身につけた技術を、上位個体のいる前では発揮せず、上位個体が目の前からいなくなるなどして、社会的状況が変わった後に初めて発揮したという経過自体は、まちがいないのであろう。

同調行動と自粛

広域に分布する陸鳥全般に言えることのようであるが、スズメもその例外ではなく、興味深い生態的特徴をもっている。後述するように、スズメとイエスズメは、生物社会的立場が西洋と東洋で顕著に異なっているが、英國の著名なスズメ属の専門家であるデニス・サマーズ=スミスによれば、行動的な側面でも大きな違いが見られるという。繁殖期のスズメは、英國では、極度に隠密に行動し、すぐ近くで繁殖していても人間が気づかないほどであるのに対して、東アジアの都市部では、用心深い傾向はあるものの、周知のように人目につく行動を平然ととるのである。

また、スズメは、数つがいが集まって営巣し、繁殖期以外には群れの中で生活するほど社会性の強い鳥であるが、個体数の少ない英國では、つがいごとに離れて営巣する。それに対して、ポーランドをはじめとするヨーロッパ中

央部では、繁殖行動が始まると、つがい単位で繁殖地に帰って行くのである (Summers-Smith, 1998, p. 135)。このように、場所や環境によって正反対なほど行動様式が異なるのは、環境に適応した行動をしているためなのであろうか。そうであるとすれば、同じ地方に棲息する全個体が、一律に同じ行動をとるという事実が説明できないように思う。また、後述するムクドリのような、季節による変動ではないので、これを“本能”的なものとして説明するのも難しいであろう。このように、同種であっても複数の行動様式を、大きな地域ごとにその場に応じて使い分けていることからすると、何かがその統制をしていると考えないと、全体を適切に説明することができないのではなかろうか。

ところで、小田柿が「見えないカーテン」と呼んだのは、棲みわけの境界であり、外来種を含む異種がその中で生活環を全うすることができない複合社会の境界であった。外来種の場合は、のみならず、本来の複合社会が破壊された、周辺の中間地帯に甘んじて生活するしかない。とはいえ、運よくそこに定着できたとしても、隣接する複合社会の内部に入り込むことができるまでには、ごく稀な例外らしきものを除けば、おそらく千年以上の年月を要するのである。そして、ひとたび内部の住人になると、今度はその複合社会の揃ないし秩序に従う以外の道はなくなってしまう。その際、各個体のもつ能力は必然的に抑制される。これを個体の側から見れば、その能力の発揮を、意識的にではないにしても自粛したことになる。

別のアナロジーとして、人間の集団行動を考えてみよう。たとえば、^{みこし}神輿を担ぐ人足が、短距離走者や力士、プログラマー、画家、棋士などのさまざまな職種や年齢層の人々で構成されていても、音頭をとる囃子手がいさえすれば、全員がその指示に従って動けばよいので問題はない。問題が起こるのは、決まった囃子手がいない場合である。そのような条件のもとで、神輿を一定の方向に曲がりなりにも進めるためには、粒の不揃いな人足たちが一致協力して、全体が同じ方向へ同じ速度で動くようにそれぞれが調整しなければならない。そのためには、各人足が、自らの能力や特性を、囃子手なしに自発的かつ的確に抑え込み、互いの行動を観察しながら同じ（おそらくは多数が望む）方向へ進むよう努めることができない限り、神輿そのものは不規則な動きを続けるだけで、ほとんどその場に留まるしかないのである。

そうすると、理の当然ということでもあるが、権威への従属なのかそれとも自発的な遠慮や自粛なのかを弁別するための有力な手がかりは、囃子方や指揮

者や司令官が存在するかどうかにあることになる。ところが、生物の世界には、指揮者のような存在はむしろ稀であり、その例外に当たるのが、靈長類の群れなどに見られるとされるリーダー的存在なのである。逆に言えば、それまで単独行動をしていた動物が進化の過程の中で群れを作るようにになると、その音頭をとる存在が必要になる（今西、1951年、33-48ページ）ということなのであろう。単なる個体の優劣を越えたりーダー的存在が出現するのは、実際には人間が農耕を開始し、食糧の余剰が大量に生じた後なのかもしれない。^{〔註1〕}

コンラート・ローレンツが“無名の群れ”と呼んだ、組織のない、たとえばイワシなどの大群の動きを見ていると、全体として一糸乱れぬ行動をとっており、急速に方向を変える場合でも、個体同士がぶつかりあうようなことは原則としてないことがわかる。また、ふたつに分裂するとしても、あるいはふたつがひとつに融合するとしても、いずれもきわめて円滑かつ迅速に行なわれるのである。今西は、これを、人間には既に失われた“共同感覚”によるものと考えた（今西、1987年、158ページ）。

秋になると群れを作るムクドリのような鳥類の場合にも同じことが言えるのであろうが、イワシなどのように常に集団行動をとっている種と、ムクドリのように単独行動と集団行動を季節的にくり返す種とでは、同じ集団行動でも全く意味が違う。イワシの場合には、自由な行動の幅が最初からほとんどないのに対して、本来的に単独行動が可能なムクドリの場合には、それがある程度に

〔註1〕日本モンキーセンターの研究員を務めていた伊沢紘生（後に、宮城教育大学教授）は、白山で長期的に継続していた野生ニホンザルの観察調査の結果、野生のニホンザルにはリーダーが存在しないことを明らかにした（伊沢、1982年、1991年）。伊沢によれば、ニホンザルの野生群では、“仲間意識”と“多数の原則”によって、群れが自然に動き、競争やけんかもないという。なお、伊沢の観察では、餌づけ群でも、リーダーはおらず、優位の雄も、特にリーダー的な行動をとることはないという。

〔註2〕今西は、モンゴルの遊牧民を観察した結果、「王と名のつく人」がいても、現実には、庶民と同じように牧畜に勤しんでおり、「酋長でも呪術師でも、生活のためには、魚をとったり、獣をとったりしなければならない」ことを指摘している（今西、吉本、1978年、151ページ）。ちなみに、モンゴルのオルドス高原に生まれた楊海英（静岡大学教授）の『『中国』という神話』（2018年、文春新書）には、次のような記述がある。「中華人民共和国が成立すると、チンギス・ハーンの子孫たちが保持していた『封建的な特権』はすべて廃止され、王になる道は完全に閉鎖された」（楊、2018年、144ページ）。それまでは、名目的なものにしても特権はあったということであろう。

せよ許されているに違いない。その仕組みは実際には全くわかつていないようであるが、ムクドリの場合は、ローレンツ流に言えば、集団的行動を起こす前に、群集気分が生じ、それとともに個体差が抑制されるということなのである。いずれにしても、どちらの協調行動にしても、現行の科学知識で適切に説明できないのはまちがいない。

ところで、第6章で指摘しておいたように、一個の生体の中に統率のとれた組織として存在している細胞社会の場合には、階層構造や内的規制をもつ社会という着想が生まれやすいし、受け入れられやすくもある。生物社会や生物複合社会というものが実在するとすれば、階層構造や内的な規制を、細胞社会と同じようにもっていると考えざるをえない。両者の違いは、それが物理的なつながりに基づいて形成されたものか否かという点にある。そして、現行の科学知識では、両者の間に物理的なつながりが存在しない限り、上位からの規制という現象を説明することはできないのである。

見えないカーテンの中に入る

ところで、一般に外来種が、見えないカーテンの内側で生活できないことは、これまで見てきた通り、専門家も事実としてかなり以前から認めていた。にもかかわらず、その理由が的確に説明できていないのもまちがいない。しかしながら、その理由についてはどうであろうか。たとえば、明治神宮の森に外来植物が相対的に少ないので、周囲が完全に市街地になっていることから自力では侵入できないためとされている（新里、2014年、9ページ）が、これでは説得力に欠ける。また、前章に引用しておいた通り、宮脇昭も、「森のシステム」が機能している限り、外来種はその中で成長や繁殖ができないことを認めていた（宮脇、板橋、2000年、139ページ）ものの、「森のシステム」自体については、適切に説明できていないのである。

では、外来種は複合社会の内部に入り込めないという通則に例外はないのかと言えば、先に検討しておいたように決してそうではない。その例外らしきものとしては、植物では、前章でとりあげたモウソウチクやシュロ（萩原、1977,

[註3] 今西は、群れの起源を、単独生活が可能な個体が、繁殖とは無関係に集中するところに見い出そうとする。そのため、「群れの成員はオス・メスを問わず単独生活能力を身につけていて、必要とあらばいつでも単独生活者として生きてゆける」ことを前提にしているのである（今西、1976年、255ページ）。